

口永良部島での離島巡回歯科診療同行実習を終えて

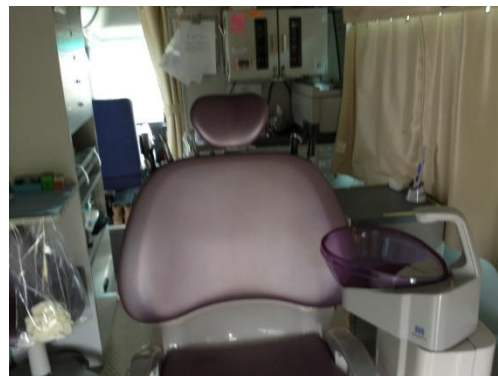
齊藤 泉

私は今回、5月23日から5月26日にかけて口永良部島での離島診療に同行させて頂きました。当初は、5月21日に出発予定でしたが悪天候によりフェリーが欠航したため、少し遅れての出発となりました。私はこれまで離島に行く機会がなく、少し歩けば歯科医院が何軒もあるという生活に慣れてしまっていたため、初めて離島へいくことへのわくわくする気持ちとともに不安な気持ちでいっぱいでした。

診療は、ポータブルの診療チェアと歯科巡回診療車「こじか号」で行われました。ポータブルの診療チェアでは、比較的時間がかからず軽度な症例の治療を行い、設備の揃ったこじか号では多数歯齲蝕や抜歯等の治療を行いました。こじか号はX線装置やオートクレーブも完備しており、チェアも大学病院のものとあまり差はありませんでした。しかし、診療スペースはバスということもありかなり狭く、患者さんは圧迫感を抱くのではないかという印象を受けました。一方、ポータブルの診療チェアはチェアの角度の調整もできず、またライトの明るさも弱く、うがいもトイレの洗面台まで行かなくてはいけないという充分な環境ではありませんでした。どちらにしても大学病院の診療しか知らなかった私は、当初大変驚きましたが、先生方はある材料でできる限り患者さんの希望に沿った診療をなさっており感銘を受けるともに、いつか先生方のように治療ができるようになりたいと思いました。また衛生士さんは何度も離島診療に同行されているようで、どこになにがあるか次はなにが必要かなど手際よくアシストされていて、自分たちの無力さを痛感しました。



ポータブル診療チェア



「こじか号」の診療チェア

診療のなかで、私は一人のおじいさんと出会いました。その方は、「歯が合わなくて大好きなたけのこが食べられない」という主訴でいらっしゃいました。この時期、口永良部島ではたけのこが収穫できるらしいのですが、「義歯が合わなくて噛めないし、おばあちゃんをひとりにできなくて大学病院まで行けないからあなたたちが来るのを待っていた」とおっしゃっていました。先生は、咬合診査や粘膜診査を行い咬合調整ならびに粘膜面に材料を付け足しました。そして患者さんに装着してもらい、状態を確認していました。患者さんは「これで、ようやくたけのこが食べられる」と満足そうに帰られました。そのおじいさんの笑顔を見ると、私まで嬉しくなり充足感でいっぱいになりました、

離島には高齢者が多く、フェリーの便数も少ないため、歯科医院が島内に無いと治療を受けることが難しいようです。そのためこの患者さんのように不具合や違和感、痛みを感じながら生活している方は少なくないと思います。そういった患者さんのQOLを少しでも向上させることが離島診療の意義ではないかと感じました。少ない器具や材料の中で、この患者さんに自分は何ができるか、患者さんの症状をどのように改善または軽減できるかなど能動的に考え、診断・治療することが求められているのだと思います。

島民のみなさまは、私たちにとっても親切にして下さり島のことなどたくさん教えて頂きました。また、子供たちもとても人懐っこくて、学校のことなどを話してくれました。地域での関わりが少なくなっている昨今にも関わらず、口永良部島の人々はみんな家族のような温かい雰囲気にも包まれているのが印象的でした。民宿の方も、おいしいご飯でもてなしてくださって私たちのお世話をしていただき、3泊4日間ではありましたがとても快適な日々を過ごさせてもらいました。



お世話になった民宿



民宿の美味しい食事

今回の離島実習では、臨床実習では体験することのできない診療を見学させて頂き、島民の方には大変感謝しております。この経験を糧に、将来歯科医師として精進していき

いと思います。また、このような機会を与えてくださった大学の先生方や県歯科医師会のスタッフの方々にもとても感謝しています。鹿児島大学歯学部の特徴でもある、離島実習は歯科医療について改めて考えるチャンスでもあり、興味のある方はもちろん、たとえ今は興味のない方でも身をもって体感されるべきだと思います。

